

わかぎのふの

取材・文 大宮美弥子
写真 小笠原圭彦
取材協力 中島らも事務所

作り方

転がる女は、泣かない、老けない、終わらない。



マジに働けば、バカを見る、ミヨーに逆らえば叩かれる。とかくOLは住みにくい。そんな過密OL社会も、食えない役者の性さえも、笑い飛ばしてやり過ごしてりや。なりたい自分が見えてくる。

60年代は日の丸オリンピック、70年代は少女マンガ、80年代はフラッシュ・ダンス。気持ちはいいほど時代とともに転がってきたわかぎえふが語りおろす、涙のち笑いの人生の秘訣。貧しき若者よ、今日の恥が明日の君の糧とならんとは、だれが言える?!

「過去10年間に、バイト・就職あわせて8種類もの仕事を経験してしまっただ」

わかきえふの5冊目のエッセイ集「O.I.放浪記」の書き出し部分である。

長いあいだ小劇場で役者をやっていた彼女は、「生活の壁」のためにさまざまな仕事を重ねてきた。本人も認める通り、ふつう役者やミュージシャン志望の若者は就職まではしないものだが、この人の場合「根が体育会系」なのだから、ついつい仕事にも「はまっつて」しまっただけらしい。

やっとな落ち着いた現在の職業も、ひとつの肩書きでは表せない。共存じ、リリハット・アーミーの看板女優兼プロデューサーにして、ときに脚本・演出を一手に引き受け、若手・中年入り乱れる役者さんたちをビシビシ仕込む。中島らも事務所所属の書き手（イラストも）兼マネージャーとして、わざわざと富んでくる魅惑鬼題のようなファッションや関係者の魔手から、意外に気弱で実務能力に欠ける中島社長をかばいし、事務所内の仕切りを統括する。周辺に転がるアホな話や身内の仰天話を「あなたがアホやる、うちがアホや、ほな」とばかりに「気に読ませるワザは、中島らもゆずり（笑）」さらに、タレントとしてD-Iやテレビ出演から講演まで、ついにこのほど、社長より「たこ足配線超り」の異名を頂戴した、あっぱれフリーターの神様である。

「笑殺劇団」リリハット・アーミーをひっぱって行くだけでもないへんなのに、くわえてこの多忙さ。エッセイを読み話を聞いてみると、この元気の秘密がすこしずつわかって

くる。キャラクターの勝利である。快気があるって率直で、大胆かつ実行力に富み、情に厚い。なんとも「男らしい」やっつなんである。以下は、そんなわかきえふがいかんして作られたか、を物語る涙のドキュメントだ。心して読まねば剣道二段の突きが入る。京威沐浴ののち、結露跣坐、膝下丹田に力を込め、一礼して読まれよ（あ、うそ）

スポ根少女、芸術にイカれる。

この人は、出生からしてドラマチックだ。船乗りの父とは歳違う母のあいだに、結婚2年で出来た子供であった。そのとき父上はなんと56歳！ため、母は親戚から浮気を疑われ「爪の先ほども似てへんかったら精には入れへんで」と脅されながら気合・発、父ぞつくりの子を生んだ。それがわかきえふ、本名鈴木美貴子嬢の誕生である。

「実家が日生劇場の裏でしたし、巨人のV9時代で、自分のハット持ってるのは当たり前。毎日、家の前で素振りやりましたよ。」

同居していた従兄弟たちと剣道の道場やスイミングに通い、強い母（70歳を越えた現在、居合の達人である）の強い希望通り、スポ根少女としてすくすく育っていた彼女は最初の転機を迎えたのは12歳のときである。

気がつくくと、回りは女ばかり。従兄弟たちが引越してしまつたうえ、男のコ相手に流血のケンカ沙汰を起す姉を心配した父上が、仏教系女子校の名門、相愛学園に入れたので

ある。そこで彼女は絵の好きな友達の影響を受け、一方、イタリアの国営放送作成の「レオナルド、ダ・ヴィンチの生涯」というテレビ番組と出会う。

「パーン★イカれました。イカれるの早いですよ、私は。しかも、イカれてしまつたら、くわーっと、いくから」

学校から帰ると8時間くらいぶっ続けて毎日絵を描くから、船を降りて長唄の師匠をしていた父がまずヒックリ。武道派の母のもとから、芸術派（えふさんの言葉によると色事師）の自分の方向へ来てくれたのが嬉しかったのだらう。娘の絵を喜んで顔に入れては「飾ってけ」とホクホク。明治のモボふりを発揮して、「フェリーニの映画がおもしろい」と教えてくれる。「どうせもうすぐ死ぬんから、おもしろいことやつたら教えてよか」みだいな

人だったそうだし、一方母親は寝具に水「なんやねん、それ？」と寝返った娘を白い目で見る。が、いかれてしまった娘は強い。取り付けた絵に全部取り付いた（……って表現も、剣道なんかで総当たりしてるみたいで怖いもんがある）結果、本格的に始めたのがマンガである。丸ペンに慣れるため、自宅でも学校でも机にインク壺を置き、ノートも手紙も全てつけペンで。この「何を考えとるんや」な習慣は、中2から高3まで続いた。「多層に本格的にイカれたのは俳優座の『云々嬢ジュリー』から。歌舞伎や宝塚、劇団四季ぐらいしか見たことがなかったの、正味ガインと入ってました。1回観ただけやけど、台詞なんて5、6年覚えてましたね。それで（芝居が）やめられへんようになったと思います。」（女優ジュリー）やて、今思えばがっかり……やね、



わかぎえふ

INTERVIEW

それから、ありとあらゆる芝居と映画を観るようになってきました。

青春はアルバイトとともに。

マンガが買いたい、映画も芝居も観たい高校生はどうするか。アルバイトしかないのである。おにぎり作りからめいぐるみの目と口を張る内職、奇術師の後ろに立ってのお姉さんまで、という豊富な職種がやはりユニークだ。収入は全部こづかいだからリッチなもので、観たい芝居があれば仲間を引き連れて東京ぐらいい平気で行ってしまおう。

ところが、学校を出ても「OLになる」というのがどういふことなのか、よくわからない。周囲の人間もほとんどが芝居関係者はかり。そ

んななかでなんとなく大人のほうへ入ったものだから、世間のことは何も知らず、20歳を過ぎても電話の対応がうまくできない。誰にも覚えがあるだろうが、定まりもしない自分の内面が重要なあまり、前回の相手を見失ってしまう時期である。なにより困るのは職場の人間関係。てやつで、自分が話を合わせないのはこらうと忘れ、凡人どもとは話が合わない、と大それた悩みを持つのである。

「世間的なおしゃべりが苦手で、自分と同じ集合体のヤツとは喋っても、「わかかってくれへん人とは喋れへん」ような子供だったのが、バイトするようになって直ってきた」
えふさんにとって決定的だったのは、「東京でも、いっとこか」のノリで移住した首都の印刷会社での写植・版下経験である。冊の本を抱

えた超・多忙なチーム内にいると、同じ畑でなくとも、相手にわかる言葉がはつぽつ見つかるようになった。しかし、それほどみっちり仕事をやって、よく芝居が売れたものなど感心する。20歳過ぎといえは、恋愛沙汰も仕事のうち（なりケないか）と思うのだが……

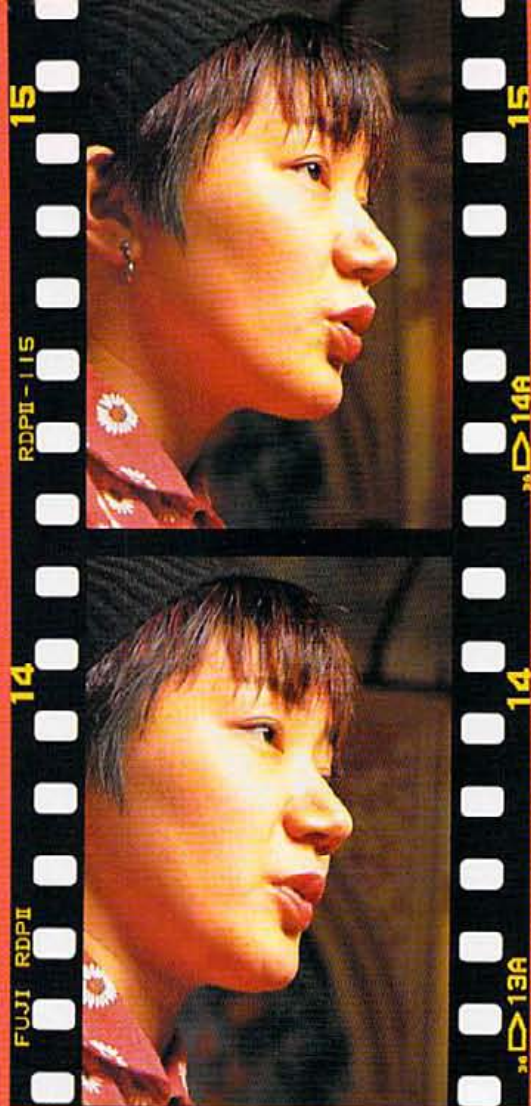
「そのときはすつ、同時にやっていたんですよ。版下の仕事で1日2時間ぐらい働いて、同棲（下ホホ）わかぎえふ やって、1日に芝居の稽古、けっこう体力あるやん、と思ったけど、好きなものを手放さないと、せんとん横にひるがって行く。でも手放したらアカン、と放さずいたら、めっちゃめっちゃしんどかった。結局どうなったかというと、ふられたんですよ」
5年ぶりに大阪へ帰ってくると、梅田の駅は

阪神の優勝騒ぎである。「人がふられてんのに、踊ってる場合かい！」刺り目になたり目で、阪急からは横丁のバチくさい古い屋のおばちゃんにみてもらう。すると……

「あんな男のゴヤな。でも相続税のケがあるからお父さんの相続するで」
「いや、オヤジはもういてません」
「おかしい。お母さんの名前と年齢は？あつ、お母さんもオトコやわ」
「おいっ！」

2年くらいは笑いながら泣いていた状態だというが、次の年には「リリパット・アーミー」を結成する。帰阪して2年目には「匿名行為」への客演も含めて、年間5本芝居をやっていた。「こんなに芝居ができるなんて夢みたいな話や。こんな状態は、もう、生いつ来るかわからん。





これを手放してたまるか、と思つてたら、古い知人の中島さんから「独立するからいっしょにやれへんか？」とて言われて」

長い苦節のバイト生活にビリオドを打ち、気に浮かび上がった……とほいたいところだが、これよりわかきえふの良の受難時代が（べん、べんべんと鳴り物入りで）始まるのである。

**やめや、やめや、
もうやめや……。笑つて暮らせば、
ハッピー、カムカムー**

「この人は、間違つてもウジウジすることはないやろ」

今でこそ、そう思えるえふさんだが、この時期までは本当に何でもよく気にするほうだった。芝居の制作をするようになると、逆にやりたい芝居はできず、まわりに流されてはか

り。

「なんでコイツらの尻ぬぐいしてんねん。私の20代、いっこもええことあらへんわ」と悲観的な時代が続いた。01ならば、芝居と仕事は分けて考えなければならぬが、自分たちの事務所なら自分たちの芝居もできる。それはええなあ……とやってみたら、制作上の責任がいきなり自分ひとりにかかつてきた。「こら、ハメられた」と思いつつ、チケットの予約までこなす。一本の芝居で、4原も使せたらええに胃潰瘍に、「あかん、死ぬ」と思つていたら、中島社長のほうが先にアル中で入院。

「何するんや、コイツ。給料払えるんかな、あの……さん……」

「今夜、すべてのパートで」に美しく描写されたのであった。今日から絶対に泣かんとさう、泣くくらいなら笑ひ飛ばそう、と決めた日があった。20年5月、自分で初めて書いたワザの芝居の直前である。この頃、自分で

思つてもなかつたいろんなことが一度に起り、目の前がぱつと開けた。まず、プロデュース公演ができるようになる。エッセイの仕事も初めてもらう。東京公演に行くようになり、それまで5年ぐらい切れていた友だちとの縁がまたつながる。

「もう、ええっか。これであかんかったら、もうやめや、やめて中国にでも住もう」

20代の前半と後半を東京と大阪で半分ずつ過ごしたから、日本に未練はない。その頃は恋愛もして、それについてもよく泣いていたが、終けていても身体にも気持ちにもいいことはない。考え方を考えよう。やめや、やめや、もうやめや……

そんなとき、なんとなく買つてきた芝居シツ子のCDを聞いて、びっくりしたのが「イヘイヘ・ブキ」である。

「あなたが笑えば私も笑つ」

私が笑えばあなたも笑う。
ふたりで笑つて暮らせば、
ラッキー・カム・カム。

「笑かす歌ですよ。人を食つたような歌ですけど、「自分が笑つてないのに、相手のヤツ笑うか？」みたいに、ご陽気に歌うのん聞いて、けっこうガーンとなった。それさうやなくて……なに感動してんねんワザ。けっこうあのじりの存在は大きかった」

それにしても、なんとなく置シツ子のCDを買つておるからと詮索したいものだが……

「仕事と人間と、その人の性質、考え方というのは、何もかも別物でしょう」ところがその

頃は、ある人を表も裏も尊敬しようと思つてたんですよ。その人が「ほくは、こういう人間や」と言うのを聞いたら、その人の性質自体が嫌いじゃないってこと以外は、ずかんと（彼の）地位が落ちた」

立派な人は何もかも立派でなければ、と無意識に考えていたのだろう。ところが人間、仕事で尊敬できるから、その人を尊敬できるわけではない。妻として立派な人を母として尊敬できない場合もあれば、母として尊敬する人を女として認めるわけでもない。その構図に気づいた途端、ありとあらゆることか「なあーんや、そういうことかよ」とわかつた。善と悪のあいだの層のほうか、善の層と悪の層よりよほど広いことが、「カラダで」わかつたのだ。

「あいまい」の幅が、大人のほうが広いんや……と。それまでガキやたんでしようね。20歳にして初めて自分が大人になりつつあることがわかつた途端、女のコが泣くのはそれが気持ちいいからであることがわかる。しかも周囲に「どうしたん？」と言われたら、かまわれないことが嬉しくて、甘えてもつと泣く。それって恥ずかしいかいかい？ けっこう笑ひ飛ばしてもいいんじやない？」

またもや「やめや」である。泣きそうになったら「今こそやめたら、どうなるやろ」と考える。半年ぐらいい意識していたら、行動も考え方も、そして容貌まですっかり変わってしまった。おっさん連中をバシバシ叩くようになった（彼女の周辺にいるのは、中島ちもをはじめひさうちもちも、カンシー石原、桂吉朝……魅力的で才能に恵まれている分、前編でいきさつにない

わかさえふ

INTERVIEW

面々が集まっている。なぜか童顔になって、年が下かって見えるようになった(去年はついに馬券場で「君、待ちなさい、幾つや?」と肩をつかまれ、「おっちゃん、やめてよ。私50歳やで」「兄ちゃん30か、若さう見えんなあ」と、騒動あったと(苦笑))

20代。金なし、体力なし、明日も見えん。だけど、いつかはどうかかなるさ?

そして、現在のわかさえふがいい仕上がりで目の前にいる。

「いつも芝居するコにも言うてるんやけど、20代はいちばん辛い時期かもしれへん。金もな

ければ、体力もない。明日も見えへん。うちの役者でも、1週間公演して寝込むのは20、21歳の男のコばかり。私もそうやったけど、20代は身体のバランスが崩れてる時期なんです。瞬発力だけで持久力がないから、自分は20代の人より体力があると思ってる時期で、それが精神力や自分の本来やりたかったことにまで影響してくる。自分が食えなかったから言うのじゃないけれど、ある程度までの金銭力は身体にも心にも影響してくると私は思っています。明日の飯にも困る状態では、芝居をやる気も失せるし、やり続けても、いいものはできないんです。だけど、それでもやりたいうことをあきらめずに行ったら、(少年の声色で)きっと、いつか、どうかかなるさ。今がいつ

ばんしんとい状態なのを決して忘れないでほしい。体力も精神力も、やがて落ち着いてくる。少なくとも金銭力の弱った状態が精神力と体力を弱らせているんだから、もうすこししたら、何もかもマシになるということを覚えたいなら、ラクですよ。私は20歳のときにぐわつと変わって、それまでの片鱗も残さなかったですよ。その後、30歳前までビュア・ベースでできたのが、またぐわつと変わって「ま、いつか一みたいなヤツになってしまった。20歳の頃何を考えてたかも、今ではあんまり覚えてない。また変わるんでしょうね。もっといい加減になるかもしれへん。」「底、30歳になったら冒険家になるで、と宣言して

The Real Face

無料体験
受付中!
まずは
お電話を!

経験豊かな
スタッフによる
少人数制レッスン
保険制度の導入で
安全面も
しっかりキープ

もっと冒険、もっとエキサイト。
エグザスダイブカレッジ

THANKS CAMPAIGN

おかげさまでエグザスダイブカレッジ
“ノービスI”取得者が10,000名を突破しました。

限定
30名様

10,000名もの国際ダイバーを世に送り出したエグザスダイブカレッジでは、サンクスキャンペーンとして、ダイビングライセンスの取得をお考えのあなたに講習料50%OFFと無料体験をプレゼント/まず無料体験でダイビングの楽しさをエンジョイしてください。アフターファイブや休日のイベントとして、お友達をお誘い合わせのうえお申し込みください。レンタルシステムが整っていますのでテブラでOKです。

ノービスとは、これからダイビングを始めようと考えているみなさんのためのダイビングトレーニングコースです。これを終了すると、BSACの認定書(カード)が取得でき、上級(ファーストクラス以上)のダイバーと一緒にダイビングを楽しむ

●初級国際ダイビングライセンス取得コース●
(ノービスI)

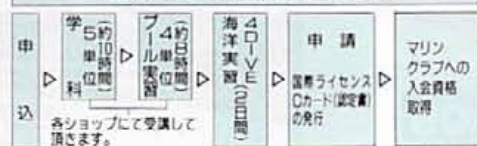
通常講習料
40,000円を ➔ **20,000円に!!**

もっと
お得! さらに、2名様以上でお申し込みいただきますと
講習料がお1人様**15,000円に!**

すでにライセンスを取得している方
には、うれしい特典つき!

- マリクラブの入会金(10,000円)が無料。
 - レンタルシステム、プロショップでの購入割引。
- *料金は全て税抜価格です。

国際ライセンス取得の仕方



京都北大路店

Tel.075-492-6118

〒603 京都市北区小山上杉町49-1 北大路ビブレ3・4F

(地下鉄烏丸線北大路駅直上)

■ 営業時間 平日12:00~22:00/土曜10:00~22:00
日・祝日10:00~19:00/火曜休

各店でキャンペーン受付中!

梅田inヒルトンプラザ Tel.06-345-1627

なかもず店 Tel.0722-50-4600

奈良学園前店 Tel.0742-43-9387



DIVE COLLEGE

profile

1959年大阪生まれ

中島らものマネージャーとしてスタート。現在は、中島らもと「リリパット・アーミー」を主宰するほか、女優、エッセイスト、テレビの司会、ラジオのD.J.などでも活躍中。関西では数少ない女性演出家の一人である。94年8月、新たな劇団「ラックシステム」を旗揚げしている。

